

平成26年度 東京都写真美術館自主企画展

佐藤時啓 光—呼吸

そこにいる、そこにはいない

Sato Tokihiro
Presence or Absence

2014年5月13日(火)—7月13日(日)

東京都写真美術館 2階展示室

展覧会概要

東京都写真美術館では佐藤時啓の個展「光—呼吸 そこにいる、そこにはいない」を開催します。光・時間・空間・身体といったキーワードをテーマとして、写真装置による制作を続けている佐藤時啓は、光が小さな穴を通じて像を結ぶという基本的な原理への興味や驚きを出発点として、ピンホール・カメラやカメラ・オブスクラ、長時間露光を用いた制作を展開しています。本展では<光—呼吸>シリーズや移動式カメラ・オブスクラによる最新作に、当館の新規収蔵作品も加えた99点を展示。佐藤が初期から取り組み、培い、今もなお発展し続ける、表現のフィロソフィを追求します。

主 催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

助 成：芸術文化振興基金

協 賛：株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／エプソン販売株式会社／株式会社安井建築設計事務所／ライオン株式会社／清水建設株式会社／大日本印刷株式会社／損保ジャパン・日本興亜損保／日本テレビ放送網／東京都写真美術館支援会員

協 力：株式会社カンマ／有限会社ワーカーズ

東京都写真美術館

● 本展のみどころ

佐藤時啓、初の大規模個展

当館の新規重点収集作家である佐藤は、光・時間・空間・身体をテーマに、写真装置による制作を通じて80年代後半から国内外で活躍し続けています。本展は日本の現代写真界を牽引する佐藤の初期作品から最新作までを見渡す、初の大規模個展です。

写真の原点と可能性を再発見

光が小さな穴を通じて像を結ぶという摩訶不思議な現象は、いつの時代も人々を魅了してやみません。撮影器材の開発から実験的な撮影に至るまで、佐藤が探求しつづける様々な試みは、写真の原点へと還り、その表現の可能性をわたしたちに問いかけます。

美しいプリントの数々に注目

本展開催にあたり、半数以上の出品作を高精細なニュープリントで展示。これまでに発表された数々の作品が作家自らのプリントにより、さらに美しく鮮やかに蘇ります。また、本展では<Wandering Camera>プロジェクトで撮影された動画作品より、新たにプリント作品を発表いたします。静謐な空間に漂う光の気配を美しい大判プリントでご堪能ください。

● 作家略歴

佐藤時啓（1957-）

1957（昭和32）年、山形県酒田市生まれ。

84年、東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。90年、第6回東川賞新人作家賞、第18回日本国際美術展で美術文化振興協会賞・いわき市立美術館賞・埼玉県立近代美術館賞の3賞を受賞。海外での評価も高く、93年の第1回アジア太平洋現代美術トリエンナーレ（ブリスベン、93年）をはじめ、第6回ハバナ・ビエンナーレ（97年）、第9回バンガラデシュ・アジア・アート・ビエンナーレ（99年）などに招待され、「空間・時間・記憶」（95年）、「日本写真史展」（03年）などの国際巡回展やシカゴ美術館での個展（05年）など多数の展覧会に参加し出品している。



2 : <<Shirakami #7>> シリーズ<光-呼吸>より
2008年 インクジェット・プリント 作家蔵

● 主な出品作品 ● 出品点数：99点

<光一呼吸 Photo-Respiration>

光を手にした自らの動きにより三次元空間を写真の構造の中に作品化した。長時間露光撮影により、佐藤時啓自身が、ペンライトや太陽光を反射させる手鏡の発光体を持って風景の中を歩き回り、光の痕跡を写真に刻み込んだモノクロ作品のシリーズ。1980年代後半から開始されたこのシリーズは、モノクロ・ネガで撮影され、ゼラチン・シルバー・プリントとして発表されているが、本展のためにインク・ジェット・プリントによる新バージョンを展示。佐代表作を含む「City Scape」、「From the Sea」、「in the Snow」、「Trees」の全5セクションから大サイズのプリントで紹介。

<Polaroid Works>

ポラロイド（拡散転写方式印画）によるシリーズ。

ローマ、アインドホーベン、ユカタンの3か所で撮影されたカラー作品でインスタント・カメラのPolaroid Type 59を使用している。<光一呼吸>の世界観が、小サイズのポラロイドによって表現されている。モノクロ、大判プリントによる<光一呼吸>シリーズとの対比も興味深い。

<Gleaning Lights>

ユニークな構造を持つピンホール・カメラによるカラー作品。

ピンホール・カメラは作家自身が制作し、いくつかのヴァリエーションがある。24コのピンホール・カメラが45度ずつセットされ360度のパノラマ撮影のカメラ、2穴、3穴、6穴、12穴のカメラなどによって撮られたプリント作品を展示。デジタル技術を全く用いずに撮影されたプリント作品を展示。また、<Gleaning Lights 2>として、デジタル技術を用いたピンホール・カメラによる作品も紹介。

<Wandering Camera>

現場のイメージーションを他者と共有する一つの手段として1990年代からカメラ・オブスクラを制作するようになった。ラテン語で「暗い部屋」を意味するカメラ・オブスクラとは、ピンホール現象を応用して、映像をよりコントロールできるようにした光学装置。ルネッサンス期に画家たちが描画の補助として盛んに用い、フェルメールも使用していたとされる。

このシリーズは、光が映像になることの本初的な仕組みを他者と共有するために巨大なカメラ・オブスクラを車に牽引して、国内のみならず韓国にも行脚した壮大なプロジェクトである。本展では、カメラ・オブスクラの動く映像を静止させた写真作品として紹介。

また、<Wandering Camera>を小型かつテント型に改良し、地面に映るイメージを8×10インチの大判フィルムカメラで記録するプロジェクトを近年開始した。日本列島という、縦に細長い、太陽が海から昇る場所も沈む場所も同時に存在する国にいることを意識し、今回は自宅からの風景に始まり、かつて訪れた東北から三陸にかけて撮影。現在進行形の新シリーズ<Wandering Camera 2>を精細なプリントにより、本展で初めて発表する。

● 作家インタビューより

都市や海、木々のなかに浮かぶ光の点と線。佐藤時啓の「光一呼吸」シリーズは見る人を不思議な世界へと誘い込む。しかもこれらはすべて8×10の大判フィルムカメラで長時間シャッターを開け、作家自身が光を手を持って動くことで写し込まれたものだ。本展では、このほかに自作のピンホールカメラで撮影するなど、写真の原理への関心から生まれた代表作が並ぶ。「写る」ことの驚きに満ちた世界を追い続けてきた佐藤氏に、展覧会や作品についてお話をうかがった。(東京都写真美術館広報誌「eyes vol.81」より)

写真の原理にこだわる

佐藤さんの<光一呼吸>シリーズを見て、誰もが思うのが「どうやって撮ったんだろう？」ということだと思います。どのように撮影されているのでしょうか。

佐藤) 夜、長時間シャッターを開けて、その間に僕自身がペンライトで光を発して、海の中や木の周りを動き回って撮影しています。日中の撮影ではレンズにフィルターをつけてシャッターを開ける時間を長くし、鏡を使って太陽光をカメラに向けています。



3 : <<#284 Dojunkai Apartment>> シリーズ<光一呼吸>より
1996年 インクジェット・プリント 作家蔵

8×10という大判のフィルムカメラを使い、後から光を加えるなどの操作はしていないのですね。

CGだと思う人もいるかもしれません。

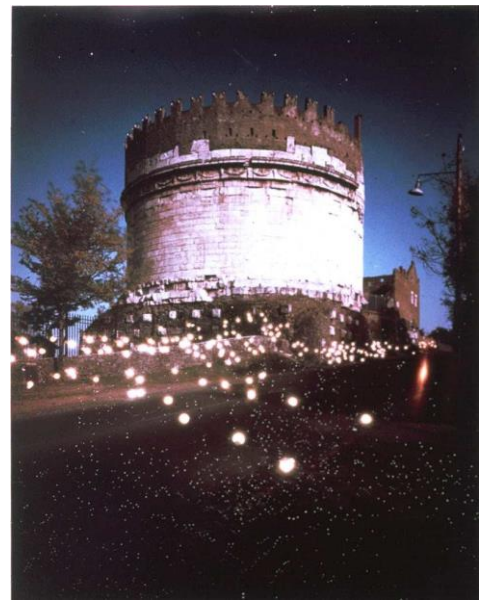
佐藤) CGだと思った人からは「なぜ三角とか星形じゃないんですか？」と聞かれましたよ。そのときは「太陽が丸いからです」と答えていました(笑)。よく見てもらえばわかりますがCGではない証拠に、丸い光のかたちがぜんぶ違うんですよ。鏡を持った僕の位置と、太陽からの光の角度で楕円になったりしています。

なるほど。最初は彫刻をやっていて、作品を記録するために写真を始めたとうかがっています。なぜ写真で作品を作るようになったのでしょうか。

佐藤) モノを作るのが好きだったので彫刻を始めたんですが、なぜ自分が作品を作るのかといたら、自分が生きているから。すごく単純なことなんです、生きるための表現なわけですよ。そう考えたとき「生命」をテーマに作ろうと思い、生命の要素の一つとして「光」を彫刻で表現しようとしたんです。しかし、うまくいかなかった。ちょうどその当時、70年代後半から80年代にかけて、美術家が写真を使って作品を作るという動きがありました。もともと写真やカメラが好きでしたから、自分でも何かできないかと実験し始めたのがきっかけです。最初はドロ잉の筆のようにペンライトを使ってみました。それがこのほかうまく行ったのです。現像してネガに線が写っているのをみて感動しました。

ペンライトは佐藤さん自身が手にしてカメラの前を動き回る。でも長時間シャッターを開けているので佐藤さんの姿は消えてしまいます。光のゆらぎは光学的なゆらぎであると同時に、身体を動かすことによる生のゆらぎでもある。そのプロセスも重要ですね。

佐藤) 初期の頃からタイトルの呼吸という言葉にこだわってきました。それはまさに生のゆらぎを表現したかったからですし、光そのものが写真に写ることの面白さに気が付いたからです。そして、光によって写真がカメラの中でゆっくり生成していくことに参加していくような想像力や、また自身の身体が写らないことによって見えない世界にあたたかな空間をつくるような喜びを感じていました。



4 : << Via Appia Antica2 (Roma) >>
シリーズ<Polaroid Works>より 1991年
拡散転写方式印画 作家蔵

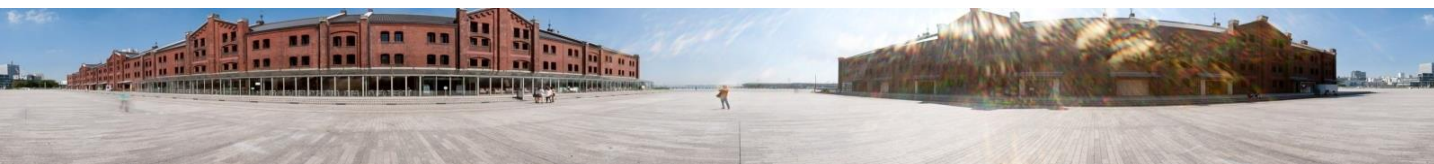
細部を見てほしい

「Gleaning Light」という作品では、レンズを使わず、針穴を空けて撮影するピンホールカメラを使われています。

佐藤) 長時間露光から始めているので、ピンホールにも最初から興味がありました。<Gleaning Lights>は「拾い集める光」という意味なんです。最初に作ったのが、24個のピンホールカメラを球体にして360度撮影するというものでした。ほかには、8×10のフィルムを入れたピンホールカメラに穴を二つ空けて撮影した作品などがあります。同時に、その頃、自動車で牽引できる「ワンダリングカメラ」というカメラ・オブスクラを自作して、全国あちこちに出没しています(笑)。

カメラ・オブスクラというのは真っ暗な部屋に針穴を空けると外の景色が倒立して映し出されるという現象を使った器機ですね。写真術が発明される前に画家たちが使っていましたが、「ワンダリングカメラ」は中に人が入れるほど大きいとか。

佐藤) ええ。「ワンダリングカメラ」ではロールサイズの印画紙を床に置いて撮影し終わったら、中に入って画像を直接見てもらいます。この十年くらいはプリントだけでなく、街での活動などいろいろなことをやっていたんですが、今回はせっかく写真美術館での個展なので、プリント作品をお見せしたいと思います。ちょうどいま技術の転換期なので、大学での研究成果を生かした最新のやり方で全てニュープリントで制作する予定です。



5 : << Akarenga >> シリーズ<Gleaning Lights2>より 2011年 インクジェット・プリント 作家蔵

佐藤さんにとって写真で作品を作ることにはどんな魅力がありますか。

佐藤) 彫刻で物を作っていくと、付随していくものがどんどん増えていく。僕自身がやりすぎてしまうタイプなのでよくいにそうなんです。でも、写真はその過剰な部分をズバッと切り落としてくれる。どんなに苦労しても残るのは表面がつるつるした一枚の紙。その潔さが気持ちいい。

切り落とされて残ったものから想像が広がりますね。たとえば、佐藤さんの作品には人間は映っていませんが、光一つひとつの痕跡はすべて佐藤さん自身の手によるもの。写っていないがたしかにそこに存在しています。「そこにいる、そこにはいない」という今回のタイトルに結びつきますね。

佐藤) 写真は光学原理によって正しく写ります。しかしそれは人間の見ることと必ずしも一致しない。私の写真に写っている風景には実は長い時間の多くの出来事があったのです。でも写っていないこと、見えないこと、その部分にこそ実は私の表現したいものがあるのかもしれません。

どのようなことに気を付けて展示を見ていふただきたいですか。

佐藤) 僕の作品はプリントサイズが大きいので引いて見る方が多いと思うんですが、是非近寄って見てほしいですね。細部までじっくりと近くで見てもらえるように、展示は部屋を区切って迷路みたいにしたいと思っています。

(2014年2月インタビュー 構成：タカザワケンジ)

● 展覧会公式カタログ

佐藤時啓 光一呼吸 そこにいる、そこにはいない

Sato Tokihiro: Presence or Absence

定価 2,500円(税込)

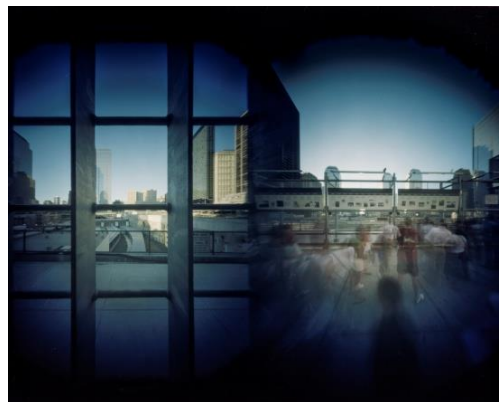
東京都写真美術館ミュージアムショップにて発売。



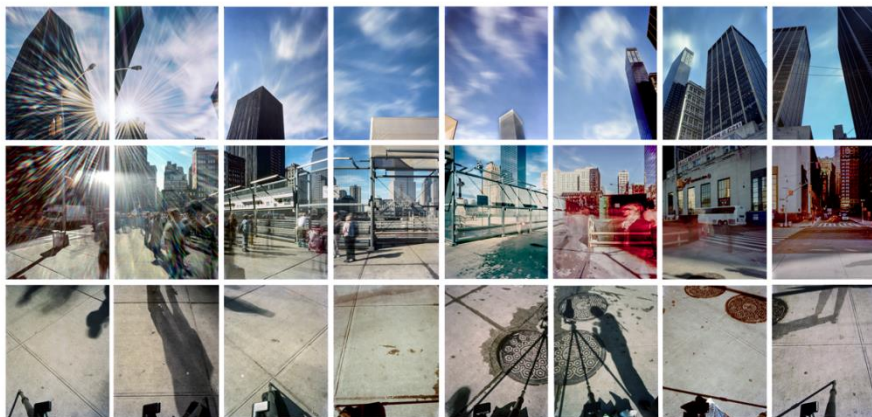
6 : 《Kashiwazaki , 2002.9.20.16:10-,28 sec.,Clear》
シリーズ<Wandering Camera>より
銀色素漂白方式印画 2002年 作家蔵



7 : 《Musenyama#1》
シリーズ<Wandering Camera2>より
インクジェット・プリント 2013年 作家蔵



8 : 《The Site 2 holes》 シリーズ<Gleaning Lights>より
2005年 インクジェット・プリント 作家蔵



9 : 《The Site》 シリーズ <Gleaning Lights>より
2005年 発色現像方式印画 東京都写真美術館蔵

● 関連イベント

佐藤時啓による講演会

日時：2014年5月17日（土）15：00－16：30

開場：14：45（予定）、整理番号順入場、自由席

定員：70名 会場：1階アトリエ

対象：本展覧会チケットの半券をお持ちの方、当日午前10時より1階受付にて、整理券を配布します。

佐藤時啓によるワークショップ「段ボールカメラで写真をうつそう」

段ボールと虫眼鏡で手作りカメラを作り、段ボールカメラを使って実際に撮影します。

講師：佐藤時啓（写真家）

日程：

【Aコース】 5月31日（土）10：30－16：30 ※大人対象

【Bコース】 6月1日（日）10：30－16：30 ※小学3年生～中学3年生対象

定員：各コースとも15名

参加費：【Aコース】一般 3,000円、学生（高校生以上）2,000円／【Bコース】1,500円

※要事前申込み

※詳細はホームページをご覧ください。

担当学芸員によるフロアレクチャー

毎月第1・第3金曜日 14：00より

※本展覧会チケットの半券（当日有効）をお持ちの上、会場入り口にお集まりください。

※関連イベント等は予告なく変更される場合があります。

※最新情報はホームページをご覧ください。

開催概要

平成26年度 東京都写真美術館自主企画展

佐藤時啓 光一呼吸 そこにいる、そこにはいない

展覧会名：佐藤時啓 光一呼吸

サブタイトル：そこにいる、そこにはいない

展覧会名（英）：Sato Tokihiro：Presence or Absence

会 期：2014年5月13日（火）－7月13日（日）

会 場：東京都写真美術館 2階展示室

主 催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

助 成：芸術文化振興基金

協 賛：株式会社ニコン／株式会社ニコンイメージングジャパン／エプソン販売株式会社／
株式会社安井建築設計事務所／ライオン株式会社／清水建設株式会社／大日本印刷株式会社／
損保ジャパン・日本興亜損保／日本テレビ放送網／東京都写真美術館支援会員

協 力：株式会社カシマ／有限会社ワーカーズ

観覧料：一般 700（560）円／学生 600（480）円／中高生・65歳以上 500（400）円

*（ ）は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員

*小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

*第3水曜日は65歳以上無料

開館時間：10:00～18:00（木・金は20:00まで） ※入場は開館の30分前まで

休館日：毎週月曜日

お問合せ

東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel.03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://www.syabi.com>

展覧会担当：鈴木佳子 y.suzuki@syabi.com／田坂 博子 h.tasaka@syabi.com

広報担当：久代 明子 a.kushiro@syabi.com／平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com／

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください。